

Title	私の鈴木公雄論(3)
Sub Title	
Author	鈴木, 透(Suzuki, Toru)
Publisher	三田史学会
Publication year	2006
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.74, No.4 (2006. 3) ,p.135(455)- 143(463)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	鈴木公雄名誉教授追悼記念講演会講演録
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20060300-0135

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

私の鈴木公雄論③

鈴木 透

はじめに

ご紹介頂きました、法学部の鈴木透でございます。

まず、はじめに、本日はこのような会にご多忙のところおいで頂きまして、まことにありがとうございます。遺族を代表いたしまして、皆さまに厚く御礼申し上げます。

ただ、少しだけ注釈的に申し上げておきますと、今日のこのような会の発案者は私でございます。実を言いますと、父が亡くなりまして、すぐに母は一周忌をどうしようかと心配し始めました。普通の一一周忌にするのでは何か物足りない、何か少し

変わつたことをやつてみたいというわけですね。ご存知の方も多いかと思いますが、父と母は本当におしどり夫婦の見本でしたので、父が亡くなりましてから、やはり母に何か新たな人生の目標を提示しないとおかしくなつてしまふのではないかと私自身心配しまして、それだつたら一周忌には父に関する講演会をやつたらどうかと私から提案したのです。それには、一番学問的に近い方々のお手を煩わせることになる。それでは申し訳ないから、私も喋るということにして、民族学考古学の阿部先生はじめ、諸先生方を押し倒してお出まいいただく。それによつて父の供養にしたい。すると、母はもう一つ返事で喜びまして、阿部先生以下、民族学考古学専攻の先生方も、快くご協力

してくださいことになりました、実現の運びとなつたわけです。

なぜ、このようなイベントを考えたかといいますと、一つには本当に母に何らかの目標を与えたたいということとももちろんあつたのですけれども、それ以外にも色々と理由があります。一つは父の様々な研究を継いで下さつているような方々との間で、私自身がどのような新たな関係を再構築できるのか、私自身挑戦してみたいということがありました。それは、ある意味で私自身がどの程度の学者としての幅を持つているのかを改めて問い合わせすことでもあろうし、安藤先生や櫻井先生のお話と一貫性のあるような、そういう話を果たして私ができるかどうか、チャレンジしてみたいという気持ちがありまして、そのことによつて私は父に対して何らかの供養ができるのではないかと考えたからです。

安藤先生と櫻井先生にお願いしたというのも私の一存で決めさせて頂きました。もちろん、ここにおいでの方の中には、鈴木公雄について喋るということであれば、おそらく2時間でも3時間でもお話しitただけるような方がたくさんおられるのは重々承知しているのですが、なぜ安藤先生や櫻井先生に私からお願いしたかといいますと、世代的に私に近いということが一つあります。それともう一つは、実はテーマ的にお二人とは必ずしも全く接点がないわけでもないということです。例えば安藤先生は食料の問題をなさつておられるということですけれども、私は専攻がアメリカ研究ですが、法学部の私のアメリカ研究のゼミでは、食文化というものを集団の記憶の結晶として捉えな

おして、食文化に対する意識改革を通して、人々の帰属意識とか集団間の様々な軋轢を解決していく糸口がつかめないものか、学生たちと考えたりもしています。ですから安藤先生の研究と全く接点がないわけでもない。

また、櫻井先生には、物質文化研究や歴史考古学の方の研究会に呼んで頂いて、アメリカン・スタディーズの中で歴史考古学がどういう意味を持ち得るかについてお話しさせて頂いたこともかつてございまして、私自身、歴史保存学が現代アメリカにおける集団的記憶の再構築に果たしている役割に関して論文や本に書いたりしておりますので、そういう意味でも私と全く研究の接点がないわけでもない。そういう方々と私自身がジョイントのセッションを組んでみたい。そのことによつてもし私がそこで何らかのつながつたお話をすることができれば、それによつて父の遺産を私なりに再構築して、専攻や領域は違いますがそれでも、同じ慶應に勤めている研究者として、色々な形で今後ともコラボレートしていけるようなきっかけを、父の一周年に記しておきたいという思いがありました。それゆえここにお出ましいただき、多くの方々にお付き合い頂いているというわけであります。

ですから甚だ私の我がまま、また母親に目標を与えるという個人的な事情のために皆さまをお煩わせしているように思いましたが、大変その点は申し訳なく思つておりますが、その点は、それこそが父の供養になるというふうにご理解いただいてご容赦して頂きたく存じます。

病死での「発見」

それでいいよ本題に入りますが、私のように、親に教員を持ちますと、子供としては非常に割に合わないところがあります。それはどういうことかといいますと、努力していい結果を出しても、あ、お父さんが先生だからね、とそれで済まさってしまう、つまり、何かいい結果を出しても、功績は親に持つていかれてしまうのですね。そのために私がどういう人間になってしまったかといいますと、とにかく親のおかげでいい結果が出るんだといわれたくない、そういう思いが強くなるのです。その結果、できるだけ独力で成し遂げたいという願望が強くなる。ですから、驚かれるかも知れませんが、私は父親から研究者として、学者として、できるだけ影響を受けまいとしてきたところがあります。その証拠に、私は父の授業とか講演会とかに顔を出したことは一度もないのです。それから、分野が違うからということもちろんあるのですが、父親が書いたものも、一度も真剣に読んだことがない。父は最も身近な学者なのですが、この人から影響を受けたという風にいわれたくないところがありまして、自分の学問は自分でちゃんと作ったんだ、という何かそういう証拠を残しておきたい、そういう願望があつて、父親からはできるだけ影響を受けまいとしてきたと思います。

ところが、父親がもうあと余命幾許かということになりましたて、母は父が最後の入院をしてから五〇日間くらい結局ずっと慶應病院に泊り込むことになるのですが、それも時々はやはり家に帰つて洗濯もしないとということがあつて、時々私が行つ

て代わりをすることがありました。そして、父親の命も後何日かだなあ、などと考えながら、父親と二人で病室にいたときに、ふと鈴木公雄という学者の軌跡が頭の中をよぎりました。父親からは影響を受けまいとしてきた自分でですから、父の学者としての軌跡を直視するような、そういう気になることもそれまでなかつたのですが、ここに至つて、この人の人生とはどういうものだったのだろうか、とふと考へてみたわけです。すると、非常に恐ろしいことに気がついたのですね。それは何かといひますと、実は私自身が現在まで辿つてきている研究者、学者としての軌跡と恐ろしいほど似てゐるところがある、ということに、いくつか気がついたのです。

例えばどんな点かと申しますと、まず一つ目は、父親は、ここにいらっしゃる近森先生や小川先生をはじめ諸先生方と新しい専攻を作つたわけで、新しいカリキュラムをゼロから作るという仕事を若い時にしたことになりますが、実は私自身が法学部にいてやつてることもまさにそれなんですね。私は、法学部に助手で行きました、そのあと一九九三年に大学設置基準の大綱化という、いつてみればカリキュラムの自由化が起こりました。それまでは文部省による縛りが色々あつたのですけれども、各学部が自由にカリキュラムを作つて良いことになります。そこで法学院では、外国の文化、社会、歴史を総合的に学ぶような新しい外国研究講座として、地域文化論という授業を作りました、私はその中のアメリカの部門を担当することになりました。実は私は、当時助手だったにもかかわらず、こうい

う講座を作つた方がいい、もし作つてくれたらちゃんとやりましたからということを学部のカリキュラム委員会に行つて言いましたところ、それが通りまして、一九九三年度から地域文化論を担当することになったのです。今では三田にそれに続くゼミが設置されていまして、昨年からはそれを副専攻として認定するというところまで一〇年かけてやってきました。今までなかつた科目群を立ち上げるという作業は、ある意味では父親が新たな専攻を立ち上げたのと同じことをやつているのではないかと思えたのです。

それから、さらに共通点としては、実は父親は、学問の体系性に非常にこだわりがあるようで、それは『考古学入門』という本を読んでいただければお分かりいただけるかと思いますが、とりわけ基礎的な入門教育をとても重視するところがあります。安藤先生や櫻井先生のお話にも出てきたのですが、父は一般向けの文章を一生懸命書いた人間でして、入門的な学問との出会いの場をセッティングするのを非常に好むようなところがありました。が、実は、私自身がカリキュラム改革の時に一番力を入れたところもまさにそこなんですね。

一年生の春学期に、いかに良い入門教育をするか、私の分野で言えばアメリカ研究入門ということになりますけど、そういう授業を一生懸命やりましたが、非常に好評で、初年度から大体四〇〇人とか五〇〇人という履修者が来る。私自身、入門講義をやつていたときの講義ノートを『実験国家アメリカの履歴書』という教科書にしたのですけれども、体系性を教科書にこ

めようとするところや、入門教育を重視するところ、そこも父親が考古学入門を書き、考古学の入門講義を定年までやつていつたようなところと非常に似ている気がするのです。

さらに言うと、先ほど一〇年ごとにテーマが変わるという話が櫻井先生から出て来ましたけれども、色々新しいことに手を出しては、新しいネタをすぐに使いたがるというところも似ています。例えば私自身が最初に書いた本は、『現代アメリカを観る』という、アメリカ映画の最近の動向からアメリカ社会の新たな傾向がどう見えてくるかを書いた本です。その後は、現代アメリカの集団的記憶の再構築の問題を史跡保存の問題から考えるという視点で共著を書きました。今度、中公新書を出すことになっているのですけれども、それは、性と暴力のアメリカというテーマで、これも日吉の別の授業の講義ノートを本にまとめのですが、私自身も鈴木公雄に負けず劣らずというか、それに輪をかけて、色々なところに手を出しているなどころがあるわけですね。

一つのところに留まつていなくて、様々な対象に手を出す。ただそれは実は私の中では現代アメリカの問題を考える系口として色々な材料を使っているだけの話であって、視点は一貫しているんですね。父親の場合も多分そういうところがある。対象には色々なものを取り上げるのだけれども、あるいは色々なことに手を出すのだけれども、その先に実は明らかにしたいことがある意味では固まつていて、必ずしもぶれていないということですね。そういうところが似てるんですね。私は病室で横

になつている父親を見ながら、こうしたことを改めて思い起した時、あまりに似てるので愕然としたのです。私自身は父親から影響を受けまいと一生懸命自分なりの世界を自力で作るんだとやつてきたつもりなのに、分野こそ違うとはいえ、なんでもこうも似てしまつたんだろう、今までの努力はなんだつたんだろうか、と思つたわけです。

文科系の学問に対する問題意識

この原因には、大きく分けると、私は二つあるように思えます。ここから先の話は、直接父親にそうでしょ? って聞いたわけではないので、ある種推測するしかないところがありますけれども、まず一つはもしかしたら、二人の間には分野が違つてもある種共通の問題意識の発見というものがあつたのではないかなと思います。それは、文科系の学問を志し始めた人間が誰しも少なからず引っかかる問題のような気がします。

どういうことかというと、日本の大学の一般論として申し上げますが、文科系の学問によくありがちな傾向は、非常に専門領域が細分化されていて、悪い言葉で言えば蛸壺的な研究がなされている。その専攻ではその対象を取り上げるということがある種の絶対的権威を持つていて、悪い言い方をすればそのような研究に没頭するということがある意味では自己目的化しているようなところがある。ですから、門外漢の人間から見れば、そんな研究やつて何の意味があるの、だから何なのって言いたくなるような研究が、言つてみれば自己目的化して惰性のよう

に行われている。ちょっとと言い過ぎかもしませんけれども、そういうようなところが無きにしも非ずという部分が日本の文科系の学問にはある。言葉を変えていえば、対象とか専攻領域を絶対化するようなベクトルが、非常に強く働いていると思うんですね。そういう中で私自身が学部生から大学院生にかけて非常に問題意識として考えたことは、それでいいのだろうかということですね。その研究をすることにどんな意味があるのか、そういう研究は学問体系全体の中でどんな位置にあるのか、そういうことを無視して対象を絶対化してそれにのめりこんでいくような、そういうタイプの研究は果たして許されるんだろうかということですね。

個人的なことでいえば、私自身は英米文学専攻で、アメリカ文学を専攻しましたけれども、私がアメリカ文学を研究する時の比重の置き方というのは、99対1くらいでアメリカのほうにウエイトがある。だから、アメリカを研究するのに適した入り口であれば、別にそれは文学ではなくてもいい。色々なものからアメリカというものを考えてみたい。けれども、総合的に何かアメリカ文化やアメリカ社会というものを研究しようと思うと、それにあうような学科が慶應にはないわけですね。一番近いところがアメリカという名前が入っている英米文学専攻ということになる。ですが、私自身にとつては、英米文学専攻の中で文学に関係のある研究をしなくてはいけないところがある種窮屈でした。むしろ、これだけ今は様々なチャンネルからアメリカのことを考えられる時代になつていてるわけですから、

別に猫も杓子も文学からアメリカのことを研究しなくてもいいんじゃないかな。もつと他のことを専門にするような人がたくさん出てもいいんじゃないかな。そういう学科制度に変えたほうがいいんじゃないかな、と私自身はずつと思つていました。実はそういう思いがあつたからこそ、法学部でアメリカ研究のプログラムを立ち上げる時は、総合的なアメリカ研究ができるようなカリキュラムを、自分自身でデザインしたかったのです。

このように文科系の学問では、対象を限定してのめりこみがちなために、自分の研究が学問体系全体の中でどんな位置にあるのかということを見失いがちというか、自分の研究を相対化するようなきっかけが不足しているように私には思えました。

今もこういう問題意識は基本的には変わつていませんが、父親が求めていたのは、言葉を変えていうと、そのような対象を絶対化してしまったようなベクトルが非常に強く働いているような、そういう日本の大学の風土の中で、自分の研究対象を相対化できるような、もっと大きな枠組みの中で地図に描くとすれば私の研究はここにありますよ、というような、そういうバランス感覚だったのではないでしようか。そして、私自身もそういうものを求めていました。そうだとすると、父親と私が分野は違うけれども似たような傾向にあることには、ある程度の説明がつくような気がいたします。体系性にこだわるとか、入門教育にこだわるのも、学問を絶対化するというよりかは、他分野との関連の中でその学問の位置を明らかにするような視点を常に持ちながら研究をするという姿勢につながつてゐると思います

し、様々な新しい題材や分野を積極的に取り入れていくようなところも、研究対象を絶対化することと、それとは反対に相対化することとのバランスを父も私も求めていたからではないかという気がするわけです。先ほど安藤先生のお話の中で、方法論にこだわるとか、非常に完成されたもの求めるところがあるというお話を出ましたが、究極的にはそれらも、絶対化と相対化のバランスをどうやってとるかということにつながっているのではないか。それは、もしかすると同じ文科系の学問を志す過程で私自身が感じた問題意識と、実は似たものだったのかも知れないと思うわけです。

人間としての生き方

これで、私と父が似ていることがある程度は説明がつくと思うのですけれども、ベッドに横たわっている父を見ながら考へている時、どうも話はそれだけでもないのではないかと思えてきました。そもそもなんでこの人は、新たな専攻を立ち上げるとか、入門教育を一生懸命やるとかにこだわったのだろう。自分と同じように文科系学問の現状に対する不満があつたのだろうけれども、では、それはどのようにしてこの鈴木公雄という人間の中では形成されたのだろうか、そういうことも考えてみたくなったわけですね。すると、実は、これは家族の一員として鈴木公雄という人間を観察してきたからうことなのかもしれないのですけれども、現状に対する不満とか、あるいは後進のために尽くすというような発想は、私から見ると、父

の学問レベルでの動機づけとはもう少し違ったところからもきているように思えるです。つまり、父の個人的な生い立ちとも深いレベルでつながっているように思うのです。

ご存知の方もおありかと思いますが、父は子供のころに両親が離婚しております。そのような中で、大学院まで進んで研究者になりました。そういう過去を持っております。ですから父は、暖かい家庭を経験したという記憶があまりない。そういう幼少期や青年期を送ったわけですね。そのため父は、自分が父親になつて家庭を持つた時、自分自身が体験したような家庭の崩壊や、それによつて子供が被る悲劇を自分は絶対繰り返すまい、透にはさせないんだというような、ある種の悲壯な決意を持つていたのではないかと思います。それは先ほど安藤さんがいみじくもおっしゃつたこととも関係があるので、私が言うのも変なんですが、父親としては本当に最高の父親であつた。これはもう掛け値なしに自慢できることであります。とにかく家庭において、自分が自分の子供を幸せにするために一生懸命尽くすということに関しては並々ならぬ努力を払つたといいう人だつたといつていいと思います。父は、ある意味では自分自身のせいではないところでもつて不幸な経験をしなくてはならなかつた。それ故、父自身は、自分の力で現状を変えたいといいう気持ちを非常に若いころから持つていたのだろうと思います。つまり、現状を変えるということに対する思いというのは、そういう意味では彼は学問の現状を変えるということだけではなく

て、自分の人生そのものを切り開くことと全く重なつていたのではないか。それと同時に、自分が家庭を持ち後進を育てる段階になつたらば、後の人たちに同じ苦労はさせないんだという気持ちを、父はいわば個人的な生い立ちの中で非常に強く持つていたのではないかと思うのですね。

そういう意味で鈴木公雄という人間の、学者あるいは研究者、教育者としての軌跡は、傍で家庭の中の鈴木公雄という人間を知つている人間の目から見ますと、決して学問のレベルだけで完結しているものではなくて、彼がどういう生い立ちを歩んだか、その中でどういう問題意識を持つたかということと実は密接に関係しているものではないかと思えるのです。だからこそ、現状を変えるということに対する情熱と、後の人たちに同じ苦労はさせまいという決意や責任感を非常に強く持つていたのではないかと私自身は思つております。私自身は、ある意味では父親のそういう姿を日々の日常生活の中で間近に見られるような環境にいたわけですね。ですから父親と学問そのものは分野も違いますし、方法論などに関しても、父親を真似たということも全然私の中に意識としてはないのでしょうけれども、父親の生き方というものを私が日々感じられるような環境にいたことが、奇しくも私と父親の学者としての軌跡がある程度似通つたところがある点につながつているのではないかと、私自身は考えております。

さきほど、安藤先生が言われた一個一個の完成度を高めようとするような完璧症のところがあつたというお話、それは私な

りに再解釈させて頂きますと、鈴木公雄の頭の中ではこういうふうになつていたのではないかと思うのですね。つまりどういうことかというと、未開拓の部分というか整備されていない部分を自分なりに舗装するといいましょうか、道路工事でいえばまだ道路のできていないとこを整地して、そこをアスファルト流して車が通れるようにする、そういう道なきところに道を作つて整備すること、今まで道もないようなどころにきちんと道を作ること、私は鈴木公雄という人間は、そういうことに非常に喜びを感じる人間だったのではないかと思います。その整備された道によつて今までつながつてなかつたところがつながるわけですね。例えば考古学と社会経済史とかですね。そういうところが初めて行き来ができるようにつながる。現状に不満があるからこそ、いい道を作りたいと当然思うわけですよね。現状に不満があるからそれを何とか整備したい。整備するのだつたら、そこに後から来る人が楽に通れるような、そういうきれいな道を作りたい。それによつて今まで行き来できなかつたところがもつと行き来できるようになればよい。私は、鈴木公雄という人間は、多分そのことに非常に喜びを感じたのだろうと思います。それはまさに自分の人生をかけて父親が挑んだことでもある。つまり自分が置かれている境遇というものを見つめ、自分の力で打開して、後から来る人に同じ苦労をさせないということですね。そのような彼が人生をかけてやつたこと、それが鈴木公雄という学者の軌跡に、私はそのまま反映されているように思うのです。ですから特に若い世代の方々に申し上げた

いのは、ある意味では父が人生をかけてやろうとした、つながつていなかところをきれいな道でつなぐこととの持つ意味というのを、後々の世代に伝えられるようにして頂ければ、それが多分鈴木公雄が最も喜ぶことであろうということです。

専攻を作るとか、新しいプログラムを作るというのは、非常にエネルギーの要ることで、これは私自身カリキュラム改革をこの一〇年やってきて、大変な労力をそこに取られた。ある意味では自分の学者としての可能性を、もしかしたらかなり切り詰めたかもしれません。これがなければもっと別の仕事が色々できたかもしれないのですけれども、ただ私自身はカリキュラム改革をやって新しいプログラムを作るということにこの一〇年かなりのエネルギーを割いてきたことを、決して後悔はしていません。自分が学生の時には、このようなアメリカについて総合的に手取り早く学べるというプログラムがなかった。でも自分がもし学生だったら、こういうものがあつたら絶対取つただろうな、そういうものを自分は作つて実際今やっている。かつて自分は、勉強するために色々なところに行つて回り道しなくてはならないところがたくさんありました。私自身、文学研究のやり方というものに疑問を感じていましたから、それを思つていましたので、その裏づけとなるような理論的な背景を自分なりに構築するため、私自身は学部のときに様々な専攻の授業をとりにいきました。本を読んでもよく分からないので、

哲学科に行って哲学の授業を聞いて、美学に行って美学の授業を聞いて、文化人類学のこともそれなりにやりましたから、政治学科にいつてアフリカでカメルーンの調査をしているような先生のところにも行つたりとかもしました。ですから私は、四年間に取つた単位は二〇〇単位を超えていました。ですから私は、いろいろ僕は回り道をしました。でも、そこまで回り道しなくてもいいようなパッケージされたプログラムというものを後から来る人に提示できれば、後から来る人はもつと先まで行けるんですね。僕は父親が学者として一生かけてやつたことというのは、突き詰めるところと同じなのではないかと思うのです。

自分なりに学問の在り方というのに不満を感じていて、そういう思いを後から来る人にさせまいと、きれいな道を作る。そして色々なところでつながる道を作る。その道を次の世代の人たちがどんどん歩いていくてくれる。そういう姿を見ることが多分父親にとつてはこの上なく嬉しいことだった、と私は思います。ですので、これから皆さんは、せつかく鈴木公雄という人間が一生かけて作ったそういう道を、どんどん歩いていつて頂きたい。それこそ、鈴木公雄が最もあの世で喜ぶことである。と同時に、鈴木公雄が一生かけてやつたことには、そういう意味がある、それは單に学者として云々ということ以上に、鈴木公雄という人間の生き方そのものを反映するものだつたのだ、ということを皆さん、特に民考の若い方々には、頭の片隅に止めておいて頂きたい。私も同じ義塾に勤めている者として、専攻領域は違いますけれども、全く接点がないわけでもない。そのような父の傍で仕事をしておられた方々と何らかの形で、

今後とも私自身の学問の幅を広げられるような形で様々な交流

をさせて頂ければ、と考えております。

ありがとうございます。
（法学部）

おわりに

本日は、安藤先生、櫻井先生に、父の軌跡というものがよく分かるように丁寧にお話を聞いて、大変感謝しております。本来ならば、そこで鈴木公雄については語りつくされていふといいますか、私が敢えて付け加える余地がないほど十分に語つて頂いたとは思うのですが、ただ身近にいた者から敢えて何か一言付け加えさせて頂くとすれば、以上のようなことをこの場をお借りして申し上げたい。鈴木公雄が作った道を後の方々がどんどん先まで歩んでいく姿、多分父は、そういう姿を見るのが一番あの世で楽しいことなのではないかと思います。ある意味では私自身も同じようなことを今しているようなところがありまして、最初に道を作るというか、最初にプログラムを作つて整備するところは本当にエネルギーが必要で、それだけで参つてしまふようなところがありますが、それだけに、後から来る人の方がもしかしたらもっと成功するかもしれないということは大いにあります。それこそ彼が一生をかけてやりたかったことですから。現在の状況を開拓し、且つ後の世代に苦労はさせないと云ふことです。それは父が私にしてくれたことでもあり、民族学考古学専攻の中で父がしてきたことでもある。そのことを見ても覚えておいて頂ければ、息子としてこれ以上嬉しい

著作目録

一九五五（昭和三〇）年

「折本町観音山採集の土偶について」『Archaeology』21 慶應義塾高等学校考古学部（報告）一一月

「野川影向寺台貝塚」『Archaeology』21 慶應義塾高等学校考古学部（報告）一一月

「茨城県行方郡津澄村繁昌鬼越貝塚発掘報告・自然遺物」『Archaeology』22 慶應義塾高等学校考古学部（報告）一一月

一九五六（昭和三一）年

「謎の日本舊石器文化」『以前』第6号 慶應義塾高等学校文化団体連盟（論文・新田充と共に著）

「茨城県石岡市三村字地蔵久保三村貝塚発掘報告 土製品・総括」『Archaeology』23 慶應義塾高等学校考古学部（報告）八月

一九五七（昭和三二）年

「茨城県新治郡出島村大字安節安食平貝塚発掘報告 骨角器」『Archaeology』24 慶應義塾高等学校考古学部（報告）九月